

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 一般-17

学校名・団体名	新宿区立落合第六小学校
HPアドレス	http://www.shinjuku.ed.jp/es-ochiai6/index.html
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	農と経営を学ぶ落エコプロジェクト
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <ul style="list-style-type: none">○生きた身近な環境教育の実践○農業の本来の姿と意義、さらにはその将来について、様々な方々とのかかわりの中から学ぶ機会の創設○保護者や地域を巻き込んだ環境活動への意欲付け○持続可能な社会に向けて、活動している様々な方々からの学ぶ機会の創出	

- 4月○子供たちに日本の農業の現状と一側面を伝える。子供たちは、緑豊かな土地で育てた野菜のほうが、質がよく、また安心・安全であるとする意見を出した。そこで、農業の現状について、就労平均年齢、農家の実質労働賃金などの例示をしながら、日本の農業の現実と課題をとらえさせた。
- 自分たちで農業がつとまるかどうかを検証すべく、屋上に農園を創設することとした。ただ屋上には、元来畑はなく、ブルーシートに購入した土を盛って、人工の畑とした。
- 5月○購入した苗や種を畑に移植して世話が始まった。
- 保護者にも活動内容の理解を求めた。特に、野菜を役立てる場所として、落合第六小学校の給食、近隣の幼稚園、老人ホーム、連携していただく皇居にあるレストラン、さらには町内会などに野菜を提供していくこととなり、お届けや折衝のお手伝いを了承していただいた。
- 6月○野菜の水かけとわき芽とり、支柱への固定など、手間のかかる作業に、子供たちは悲鳴をあげた。
- 夏休みに交流する静岡県立富岳館高校の生徒さんたちと、スカイプを用いて交流する。生家が農家でないにもかかわらず、農業や酪農を選択する生徒の考えに、驚きつつも興味をもっていた。
- 7月○収穫が本格化する。給食にも毎日のように、「5年生がつくった落六野菜がはいっています」と放送で流され、また、野菜嫌いな子供も全部食べてくれたという声を聞く度に、農家としての自負が芽生えていたようだ。
- 夏休みに入り、近隣施設などへの配達が始まる。みな、思い思いにかごをもって配達にでかけ、お礼を言われる度に笑顔が増えていった。水掛などは、当番制をしき、保護者と協力して行った。
- 8月○地域の祭りに野菜を出品する。とは言っても、7月の猛烈な暑さによって、野菜は8月中頃には収穫が激減した。
- 静岡県立富岳館高校に他学年と保護者を含めて、交流実習に行った。ここでは、AHPチップと呼ばれる肥料を開発して、近郊農家の収穫や品質の改良を行っていた。参加者は先見性に皆感銘を受けた。
- 9月○秋野菜の種をまいていった。事前に子供たちから栽培したい野菜の注文を受けたものだ。
- 夏野菜の栽培を通してのふりかえりを行う。思ったよりも農業が大変であること、ただその分だけ、野菜を褒められたときに自信につながったことなどを発表し合った。
- 10月○江戸の時代に栽培されていた伝統野菜を、新宿区でもあちらこちらで栽培していて、それがだんだんと認知されつつあることの情報を提供する。
- 江戸伝統野菜の第一人者大竹道茂氏をお呼びして、江戸野菜についての講義と伝統野菜の栽培の実習を行う。小松菜と品川カブの種をまいた。
- 11月○子供たちが栽培していたカブと小松菜などの収穫を行う。給食にも使われ、人気を博す。
- 12月○大根の収穫を行う。屋上に盛っただけの土であるにもかかわらず、売り物と遜色のないきばえのものもあり、子供たちは喜んでた。
- 1月○子供たちの栽培していた野菜は全てヒヨドリの大群によって食い荒らされ、ほとんど原型をとどめない状態となった。人気のない屋上は、彼らにとって格好のえさ場となった。子供たちはそこから、自然のリスクも知った。
- 2月○学習の振り返りとして、子供たちが収穫した野菜の収穫量を給食に使用したもので換算して、それが概ね30000円程度であったことを知る。金額の少なさに驚く子もいたが、いかに農業が大変で、産業としては脆弱であるかということ学んだ。

学習の成果

- 農業はたいへんだという、机上の空論ではなく、子供たち自身が、その大変さとともに喜びも知った。また来年度も取り組んでみたいという子供も多く、問題提起を自分のこととしてとらえられたことは大きい。
- 産業としての農業は、真剣かつ合理的に進めないと、なかなか収益にはつながらないという考えをもつにいたった。しかし、子供たちの農法は全て完全無農薬有機栽培で進め、また野菜もブランドとして名が通っているもので行ったため、売値が安定をすれば、規模次第では十分に収益を上げるのに値することもわかった。
- 江戸伝統野菜という、普段は聞き慣れない野菜を守り広めようとする人たちのことを知り、野菜の奥深さを感じていた。また静岡での実習は、農業と真剣に向き合おうとする同世代にたいへん感銘を受けていた。

次年度からの計画

- 新たに新5年生が、規模を拡大して、本プロジェクトに取り組んでいく。また、これまで培った人材のネットワークのつながりをさらに深め、協働してこれからの食と環境についてとらえられるようなプログラムとしていきたい。